

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔注1〕奥野健男は、『文学における原風景』の中で、作家固有の自己形成空間としての「原風景」についてふれ、「このような文学の母胎でもある『原風景』は、その作家の幼少年期と思春期とに形成されるように思われる。生れてから七、八歳頃までの父母や家の中や遊び場や家族や友達などの〔A〕によって無意識のうちに形成され、深層意識の中に固着する『原風景』、それは後年になればなるほど不思議なつかしさを持って思い出され、若い頃にはわからなかった繰返されるその風景やイメージの意味が次第にわかるようになってくる。いわば魂の故郷のようなその人間の歴史の神話時代にも相当する『原風景』である」と述べている。そして東京や大阪のような大都會育ちの人々より、郷里をもった人々、作家で言えば、〔1〕太宰治の津軽、坂口安吾の新潟、室生犀星の加賀金沢、佐藤春夫の紀州熊野のような風土性豊かな自己形成空間の中で、強烈な『原風景』をもった人々には、旅行者の眺める風土や景色でなく、骨肉化した風景があり、それが常に文学の〔B〕として作品にあらわれていて、その強固さにはとうてい大都會生れの文学生は太刀打ちできない、と述べている。一方、三島由紀夫は、自己形成期に自然や風景を知らなかった上に、日本の古典や西洋の小説で〔a〕カクウの『原風景』をつくりあげたという。彼が松を指してあれは何という木かと〔注2〕ドナルド・キーンに尋ねたという挿話があるということも、同氏は指摘している。日本の土着的原風景を持たない人々は、何も三島由紀夫に限らない。人工的に砂漠化している大都會に住む〔b〕カクイツの青少年は、公団の団地や高層マンションからいくらかでも今後育ってくるのである。しかし奥野健男は、東京にも戦前には自己形成空間としての『原風景』を育成する環境があったという。永井荷風、谷崎潤一郎、夏目漱石の小説には、固有の街並みが書かれ、なつかしい地名がよく使われているのを見てうなずけるのである。同氏は山の手の恵比寿界隈〔かいわい〕に育った。彼の家は幅二メートルしかない道に面していて、樹齢三百年に及ぶ〔けやき〕の大木が二、三十本、家の附近にうつそうと茂っていた。そして鳥や蟬〔せみ〕や蛙がすみついていていたという。「こういう山の手の不安定な界隈でも子供は学校とは違う世界、『原つば』を持っていった。『原つば』は田畑が売地になったところや、屋敷のあとや昔から家や畑になつていない空地などを指すのだが、そこは学校の成績や家の貧富の差などにかかわりのない子供たちの別世界、自己形成空間であり、その支配者は腕力の強い、〔注3〕べいごまもめんこもうまい餓鬼大将であった。ぼくたち中流階級の子はおそらくその世界に入り、みそつかすとして辛うじて生存を許されていたようだった。しかしこの『原つば』こそ山の手の子供たちの故郷であり、『原風景』であった」と同氏は述べて、戦前には、東京のような大都會にも、地方に負けない自然との連帯やチ〔c〕エンというものがあつたことを〔2〕指摘している。

私は、同氏の叙述が不思議と自分の育った環境と相似していることに〔3〕或る種の感銘を以て共鳴するのである。私は東京は山の手、四谷は南伊賀町（現在の若葉町）の西念寺という寺のわきに生れ育った。このあたりは、今でこそ全くの都心であるが、当時は寺の境内には銀杏の大木が亭々とそび

え、よく登っては滑ったさるすべりの名木などもあった。伊賀流の忍者でも住んでいたような南伊賀町のすぐわきは寺町といい、坂道にそって沢山のお寺があったのを覚えている。この寺の境内がわれわれ子供達の「原っぱ」であった。べいごまにめんこのほかに自転車の曲乗り、木登り、陣とり合戦、かくれんぼ、^(注4) 試胆会、少年野球等はすべて、この寺の境内で行われた。境内のはずれにある墓場は、子供心になんとなく不気味であり、とくに日暮れが近づくと不気味さは^d バイカされ、あたかも^(注5) パシユラールのいう洞窟の幻想をいだかせてくれるものであった。そして、学校が終つて日が暮れるまで寺の境内を含む「原っぱ」を駆けめぐつて「原風景」をつくりあげていたと思う。「原っぱ」の幻想こそは、山の手の子供たちの心の故郷であり、「原風景」であつたのである。

私自身の印象でも、奥野氏の印象でも、不思議と樹木が——樗の大木や、銀杏の大木のようなものが——育つた環境と切りはなすことはできない。これは^(注6) ケヴィン・リンチの研究によつても、アメリカ人の⁽⁴⁾ 人間形成期にとつて樹木が重要な契機になつてゐることと一致していることがわかる。ということは都市の居住環境には、重要な人間形成期に必要と考えられる大樹が少なすぎることであるとも言える。大樹には多年の風雪に耐えて樹齢を重ねてきた或る種の威厳や気品のようなものがあり、また多年同一の場所に停止しながら生存していることから沈着、忍耐、^(注7) 不羈のような特性があり、動物のように自ら行動できない植物の宿命としての、受容性、客観性のようなものすら感ずる。大樹には確かに、無言にして厳しい父親の目のようなものが光つてゐるのである。そして、大樹に接しながら育つ子供達には、それが強く幼少期の印象として焼きつけられ、また多くの教訓をその中から読みとることができるのである。それは旅行の途次見ただけの大樹ではない、春夏秋冬、雨や風に耐え、⁽⁵⁾ そこに住みつき、そこに育つことが必要なのである。その他、ケヴィン・リンチの研究によれば、^(注8) 築地塀や石だたみのような屋外の舗装も強く印象に残るといふ。確かに私自身の **C** によつても、西念寺の土塀や坂道のようなものは印象が強い。ただ舗装は海外の生活では重要なものであろうが、わが国ではそれほどでもないようである。教会前の広場で遊んでいるイタリアの子供達にとつては、教会前の石の階段や石だたみは、人体と大地との接する硬さの体験から言つても、当然⁽⁶⁾ 「原風景」となりうる種類の素材であろう。

一般、東京大学の建築学科約四〇名の学生について幼少期の記憶に関するアンケートを行った。それによるとそのうちの約二五％は少なくとも樹木や木登りについてふれている。例えば、三本のくぬぎの木、一本のヒマラヤ杉、楠の木、栗の木、銀杏の木、等であつて、どれも大樹として風格のあるものである。また、地方に育つたものには小川や土手について述べたものが多く、都市に育つたものは、坂道、石の階段、空地について述べられているものが多い。これらの学生はまだ自然と連帯した「原風景」を持つてゐるようであるが、今後、時代の推移とともに公団の団地の鉄筋コンクリートの箱の中に重要な人間形成期をテレビと共に過ごす青年が続出することを真剣に考えなければならぬと思う。それらの青年はすべて、他人の体験がテレビのようなメディアを通じて自己の **D** として体内に ^e チクセキされるといふ新しい型の人間である。それに対し、ヨーロッパの

国々は住いの環境に対してもっと見識があり哲学があるということが言えよう。また、テレビのようなものが日本ほど進歩していないのは E の問題でなく、人生哲学の問題として敢えてそのようにしているのではないかと思われるふしがあるのである。

(芦原義信『街並みの美学』による)

- (注1) 奥野健男 1926-1997年。文芸評論家。
 (注2) ドナルド・キーン 1922-2019年。アメリカ出身の日本文学者・日本学者。
 (注3) べいごまもめんこも 1930-。昭和三十年代の子どもたちが日常的に楽しんでいた遊戯。
 (注4) 試胆会 肝試きまためしの会。
 (注5) バシュラール 1884-1962年。フランスの哲学者。
 (注6) ケヴィン・リンチ 1918-1984年。アメリカの建築家、都市研究者。
 (注7) 不羈 何ものにも縛られず自由であること。
 (注8) 築地塀 上に瓦がのった土塀。

問(一) 傍線部 a ~ e のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a 1 b 2 c 3 d 4 e 5

- a カクウ
- 1 カセツの住宅に住む。
 - 2 ゴウカな陣営。
 - 3 カコンを残す。
 - 4 タンカで運ばれる。
 - 5 話がカキヨウに入る。

- b カクイツ
- 1 陰謀をカクサクする。
 - 2 タイカク線を引く。
 - 3 ナイカクを組織する。
 - 4 問題のカクシンを突く。
 - 5 世間からカクゼツする。

問(二) 空欄 A
 1 経験 けません。
 2 技術 A || 6 E
 3 空間 B || 7
 4 環境 C || 8
 5 知識 D || 9
 6 原点 E || 10

を補うのにふさわしい語を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選んではい

c
 チエン

- 1 エンカイを催す。
- 2 エンコをたよって職に就く。
- 3 地下鉄のエンセンに住む。
- 4 資金のエンジヨを申し出る。
- 5 エンテン下の作業。

d
 バイカ

- 1 試験のバイリツが高い。
- 2 企業をバイシユウする。
- 3 草木をサイバイする。
- 4 バイシヨウに応じる。
- 5 蚊がバイカイする病原菌。

e
 チクセキ

- 1 チクイチ報告する。
- 2 カチクを飼育する。
- 3 彼はチクバの友だ。
- 4 家をカイチクする。
- 5 ガンチクのある言葉。

問(三) 傍線部(1)「太宰治の津軽、坂口安吾の新潟」とありますが、この二人の作家を含むグループは何と呼ばれていますか。ふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 11

- 1 高踏派
- 2 白樺派 しろかばは
- 3 無頼派
- 4 社会派
- 5 耽美派 たんび

問(四) 傍線部(2)「指摘している」のは誰ですか。次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 12

- 1 奥野健男
- 2 佐藤春夫
- 3 三島由紀夫
- 4 ドナルド・キーン
- 5 夏目漱石

問(五) 傍線部(3)「或る種の感銘」とありますが、この箇所における筆者の心情の説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

- 1 原風景と呼べるものがまだ存在した戦前の東京について語る奥野健男の言葉に共感を覚え、幼少期を回想して郷愁にふけっている。
- 2 今の都会育ちの人間にも原風景と呼べるものが確かに存在するということを教えられて、深く納得している。
- 3 団地や高層マンションで育つ若者たちが、自然が豊かであった東京を知らずに成長することに寂しさを感じている。
- 4 奥野健男の語る少年時代の追憶をきっかけに、自分にも原風景が存在すると感じるようになり、優越感を覚えている。
- 5 原風景とはかつて子どもたちの遊んでいた原っぱであったと気づき、それが失われていくことに悲哀感を抱いている。

問(六) 傍線部(4)「人間形成期にとって樹木が重要な契機になっている」とありますが、筆者の考えるその理由としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 14

1 自ら行動できない宿命を背負って生きる大樹を見ながら育つ子供たちは、その姿を厳しい父親と重ね合わせ、権威を従順に受け入れる生き方を学んでいくから。

2 厳しい自然環境の中で一つの位置から動こうとしない大樹と向き合って成長する子供たちは、自分の生まれた場所に住み続けることの大切さを学ぶことになるから。

3 鳥や蝉や蛙が住みつく大樹の下の原っぱで子供時代を過ごした人間は、学校の成績や貧富の差のない別世界で自由に生きる幸福感を忘れずに生きていけるから。

4 厳しい環境と戦いながら生き続ける大樹は、子供たちに自然の豊かさと恐ろしさを教えてくれるのであり、多くの人間は樹木や木登りに自分の原風景を見出しているから。

5 厳しい気候条件にも耐えて長い年月同じ場所で生きてきた大樹は、その威容を仰ぎ見ながら育つ子どもたちの心に多くの教訓を刻みつけるから。

問(七) 傍線部(5)「そこに住みつき、そこに育つ」とありますが、「そこ」とはどこですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

1 なんとなく不気味な場所

2 都市の居住環境

3 旅行の途次に訪れた場所

4 近くに大樹がある環境

5 宿命として与えられた土地

問(八) 傍線部(6)「原風景」となりうる「ものとして筆者があげていないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。」 16

1 原っぱ

2 学校

3 お寺の境内

4 坂道

5 教会前の広場

問(九) 本文の内容と合致しないものを、次のうちから二つ選び、その番号をマークしなさい。(解答の順序は問いません。)

17

18

- 1 原風景と呼べる体験を持たない都会生まれの作家は、旅人の視点に立って自分固有の原風景を作り出すしかない。
- 2 原っぱと呼べる空間で遊びを体験したかつての子供たちは、知らず知らずのうちに魂の故郷を形作ることができた。
- 3 原風景と呼べる空間の中で大樹が重要な意味を持つことが多いのは、日本だけに限らない傾向と言える。
- 4 時代の推移によって人工的な環境が当たり前になっていくと、自然と連帯した原風景は消滅していくしかない。
- 5 日本の古典や西洋の小説に描かれている自然の風景は作者の想像によるものであるから、それは原風景とは言えない。
- 6 原風景という観点から見ると、日本よりヨーロッパの国々の方が住まいの環境に対する見識や哲学があると言える。

2

次の文章は終戦後しばらくしての一九五〇年代に書かれた文章です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

四、五日前の^(注1)『毎日』の雑記帳欄にこういうことが書いてありました。例の「勤労感謝の日」に上野動物園の三頭の象に、大きな文化勲章が授けられたというのです。というのは、去る三日の「文化の日」に、そこに集まった子供たちに、どの動物がいちばん文化に役立つか、という課題で投票させた結果が発表されたわけです。象に七百八票が集まり、ベニヤ板製の直径^(注2)一尺の月桂冠を配した大文化勲章が、園長の手で花子さんの首につり上げられたというわけです。花子さんは勲章にはあまり興味を示さない様子だったが、子供たちの与えるパンやリンゴをうまそうにパクついて、^A鼻高々だった由です。

これはその日のラジオでも報じていましたから、聞いた人も多いと思います。なかなかおもしろい行事で、ちよつとうまく仕こめばそのまま風刺劇にもなりそうです。

いちばん文化のために役に立つ動物はなにか、ということ子供たちは何を考えたでしょうか。虎は死して^X、河馬は毎日肥料を生産する、猿は豆列車を運転することができるとし、キリンは^(注3)哨戒に役立つというようなことを考えた末に、やっぱりそれでも象がいちばんおもしろいやということになったのかもしれないし、文化に役立つとは好きな、人気のあるということだとして象に票を投じたのかもしれませんが。

またこういう行事を考えだした動物園の側は、文化の日、文化に役立つ、文化勲章というとり合せだけを語呂合せとしてやってみたにすぎないでしょう。それにしてもベニヤ板製とは大いに^B振っています。花子さんが正賞には興味がなく副賞を大いによろこんだということもなかなか暗示的です。そうして庶民的です。^Yということでしょうか。

文化の日というのは、休みの日、文化に役立つということは、人気のあるということ、文化勲章よりもパンやリンゴということ、そう受け取るのが、あたり前のようになってきています。⁽¹⁾文化という言葉が装飾としてしか通用していないのが実状のようです。それにしても文化という言葉が、何故装飾的なねうちをまだもっているのでしょうか。文化国家に始まって文化になんには気がひけるほど多様であるし、なんに文化もまたそれに劣りません。象に文化勲章の記事の出た同じ日の『朝日』の神奈川版に「パチンコ文化」という看板の写真がでていました。文化堂という店でパチンコ屋を始め、その看板のことですが、「パチンコ文化」もけっこう通用します。産業文化とか、交通文化とかいう言葉が通用しているのですから、自動車文化、競輪文化があっても道理といわなければなりません。そうして、日本人は何故これほどまで、文化が好きなのかと考えさせられます。

(イ)、今日の日本人のそれほど好きな文化とはなにか、ということになると、象に投票した子供と、大した変りもないようです。現に動物園のおとなたちも文化の日だから文化という言葉を使ってみたにすぎないでしょう。文化という言葉の使用は全く^(注4)アナアキイの状態にあるようで

す。かつて、^(注5) アーノルドは『カルチュアとアナアキイ』という有名な本なかで、無秩序になった精神を秩序づけるために教養が必要だと言いました。ところで今は、その教養とか文化自身がまた無秩序の代表のようになってしまったのです。このごろ^(注6) 深瀬基寛氏によって、^(注7) エリオットの『文化とはなにか』が訳出されました。「文化の定義のための覚書」というのが原著の名前です。そして「定義」という意味をオクスフォード大辞典から抜いてきて、その側へつけています。「定義、一、境界を定めること、限定(まれ)」

エリオットは一つの単語が⁽³⁾ 濫用されるにいたるまでは定義の必要はないといっています。(口) この数年間、カルチュアという単語の使用法を注意しているうちに次第に危懼^{きぐ}の念が強まってきて、どうしてもその定義、境界設定をすることが必要であると思つて、この書物を書いたといっています。エリオットの実際に引いている濫用は、われわれ日本人の目からみれば、さして乱暴なものとは思われません。政治家たちが文化という言葉进行深入することなく無限定に使つてゐるのを責めているのですが、それにはパチンコ文化や文化国家ほどのナンセンスや愛嬌^{あいきょう}のあるものを見出すことができません。それにもかかわらずエリオットは文化という言葉の救済にのりだしたわけです。(ハ) 今日の英国は、まだ文化という言葉概念を救いだしうる程度の無秩序にすぎないといつことができるかもしれません。またエリオットの代表するような一団、文化がなんであるかを体得しているような人々が存在するという証拠になるかもしれません。日本の乱暴極まる濫用は、すでに手のほどこしような程度にすんでいるともいえます。また、文化という^(注8) 船載^{はくさい}の概念が、それを身につけるひまもないうちに、無秩序の中へ流れこんでしまい、それを救いうるほどの人間がいけないことになるかもしれない。 (ニ) 一層のこと、文化という言葉をここできりすてしまつて、新しい言葉を作り出す方があるいはよいかとも思われます。⁽⁴⁾ 洗濯をすればきれいになるといふ程度の汚れ方ではなさそうです。しかしそれにしても文化という言葉の来歴を考えてみる必要はありません。

エリオットは言っています。

「カルチュアという用語は、われわれがひとりの個人の発展を念頭におくか、一つの集団もしくは階級の発展を念頭におくか、もしくは一つの社会全体のそれを念頭におくかに応じて、それぞれ異なる連想をとまいません。個人の教養は一つの集団もしくは階級の文化に依存し、またその集団もしくは階級の文化は、その集団なり階級の属する社会全体の文化に依存するというのが、わたくしの論旨の一部分であります。」

これはなんの奇もない当り前のこととして読み過されてしまふような文章です。(ホ) 日本のことを考えると、どうしてもここから考え始めなければならぬように思います。大正期に入ってひろく使いだされた教養という言葉がどういふ内包をもっていたか、どういふ歴史上の位置をもっていたか、をまず考えなければならぬでしょう。そうして、それは明治の^(注9) 書生、大正のインテリ、昭和の文化人、知識人という集団の名前の変遷とのつながりについて考えなければならず、さらに藩閥からブルジョアへの勢力の移動や、ソヴェエツト革命や米騒動という大正初中期の社会を

背景にして考えなければならぬでしょう。そうして更に大きくいえば、Z という状況を考えなければならず、従って伝統的なものと新しい思潮の混在を考えなければならぬでしょう。そういうことをしらべていけば案外に文化をもたない教養という矛盾したことになるかもしれない。あるいは武士道、儒教の文化とちぐはぐな教養の間に陥没して、やけくそになって、^(注10)うすでに文化とか教養を口にしたということになるかもしれません。そうしていわゆる無教養な生活人のなかに、かえって伝承的な文化の残骨が、その言葉遣いのうちに、^{ざようじゆうぞう}行住坐臥のうちに、義理人情のうちに示されているということになるかもしれません。

(唐木順三『朴の木 人生を考える』による)

(注1) 『毎日』＝『毎日新聞』のこと。後にある『朝日』は『朝日新聞』。

(注2) 一尺＝約三〇センチメートル。

(注3) 哨戒＝敵の攻撃を警戒して見張りをすること。

(注4) アナアキイ＝無秩序で混乱していること。元は無政府状態の意味。

(注5) アーノルド＝マシュー・アーノルド、一八二二～一八八八。イギリスの詩人、批評家。

(注6) 深瀬基寛＝一八九五～一九六六年。英文学者、翻訳家。

(注7) エリオット＝トーマス・スタインズ・エリオット、一八八八～一九六五。アメリカ出身、イギリスの詩人、批評家。ノーベル文学賞受賞。

(注8) 船載＝外国から運んでくること。舶来、外来とほぼ同意。

(注9) 書生＝現在の学生とほぼ同意。また、他家に寄宿して家事等を手伝いながら勉強する人。

(注10) うすでに＝「薄手に」のことと思われ、安っぽくの意。

問(一) 空欄(イ)～(ホ)を補うのにふさわしい言葉を、次のうちからそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二

度以上選んではいけません。)

イ＝1

ロ＝2

ハ＝3

ニ＝4

ホ＝5

- 1 例えば 2 ところで 3 しかし 4 従って 5 そうして 6 あるいは

問(二) 傍線部A「鼻高々だった」の「鼻高々」、B「振っています」の「振っている」の言い換えとしてふさわしいものを、各群のうちから一つ

ずつ選び、その番号をマークしなさい。 A ≡

B ≡

A 鼻高々

- 1 たいそう機嫌のよさそうなどさま
- 2 本当に生き生きしているさま
- 3 いかにも自慢そうなどさま
- 4 あたりを威圧するようなどさま
- 5 まったく遠慮のないさま

B 振っている

- 1 簡素を心がけている
- 2 いきでしゃれている
- 3 皮肉がきいている
- 4 悪ふざけが過ぎている
- 5 意表をつく面白さがある

問(三) 空欄 を補うのにふさわしいものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

X ≡ Y ≡

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|---------|---|--------|---|-------|---|---------|
| X | 1 | なお威を奮う | 2 | 土に帰す | 3 | 皮を残す | 4 | 名を伝える | 5 | 冥界を駆ける |
| Y | 1 | 負けるが勝ち | 2 | 身から出たさび | 3 | 馬子にも衣装 | 4 | 花より団子 | 5 | あばたもえくぼ |

問(四) 傍線部(1)「文化という言葉が装飾としてしか通用していない」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてふさわしいものを、

次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- 1 文化という言葉が人気があるという意味になり、看板を飾り立てるためだけに用いられているということ
- 2 文化という言葉の本来の意味がないがしろにされ、単に物事に良いイメージを持たせるためだけに用いられているということ
- 3 文化という言葉が語呂合わせの道具のようになり、文化とは全く関係のない分野でも重宝されているということ
- 4 文化という言葉が庶民が自由に使うようになり、彼らの虚栄心を満足させるものでしかなくなっているということ
- 5 文化という言葉が無秩序を代表するものとなってしまっ、教養人の虚飾を示すものに成り下がっているということ

問(五) 傍線部(2)「エリオットの『文化とはなにか』』についての筆者の説明としてふさわしくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- 1 エリオットは、文化という単語の定義を検討するにあたって、定義という語の辞書的意味を援用した。
- 2 文化という語の使用法に危惧の念を抱いたエリオットは、その語の定義が必要であると思った。
- 3 エリオットは、文化という語を深く考えずに無限定に使っている政治家たちを批判した。
- 4 文化という語の来歴について述べるエリオットは、その語の定義の境界設定を示そうとしていた。
- 5 エリオットは、文化という語のナンセンスで愛嬌のある使い方に関しては問題を感じていなかった。

問(六) 傍線部(3)「濫用」と熟語構成が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

12

- 1 譲渡
- 2 緩急
- 3 静観
- 4 感慨
- 5 臨場

問(七) 傍線部(4)「洗濯をすればきれいになる」とありますが、これは「文化という言葉」についてどういうことを言っているのですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

13

- 1 濫用されている言葉に付随した誤ったイメージを取り除けば、無限定に使用されることはなくなるということ
- 2 言葉の無秩序な使用を政治的に規制すれば、その言葉の示す概念の境界設定が明確なものになるということ

- 3 濫用されているナンセンスな言葉を排除すれば、社会が正常さを取り戻して文化国家を再建できるということ
- 4 無限定な使用法が許されている言葉を洗い出して正確に定義すれば、言葉の厳密な使用法が取り戻せるということ
- 5 精神の無秩序さを助長するような言葉を辞書から除外すれば、人々が文化的な生き方を体得できるということ

問(八)

空欄部

Z

を補うのにふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

14

- 1 世界的な文化交流の現状
- 2 後進国の西洋文化移入
- 3 人類にとつての文化の意義
- 4 先進的な文明の脅威
- 5 歴史的な文化の衰退過程

問(九)

本文の内容と合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号をマークしなさい。(解答の順序は問いません。)

15

16

- 1 子供たちがいちばん文化に役立つ動物として象を選んだのは、象の興味深い生態に強い関心を抱いたからである。
- 2 日本人は文化という言葉を好んで用いるようだが、その言葉の本来の意味や使い方を真に理解しているとは言い難い。
- 3 アーノルドは、日本の無秩序な文化を正常化するためには精神を秩序づける教養が不可欠であると考えていた。
- 4 文化という船載の概念を身につける時間の余裕がなかった日本人は、文化に代わる新しい言葉を作り出そうとした。
- 5 明治の書生や大正のインテリよりも、昭和の文化人、知識人の方が教養という点では劣っていた。
- 6 個人の教養が集団や階級の文化に依存すると考えれば、日本の庶民もそれなりの文化を伝承していると言えなくもない。

設問は以上です。